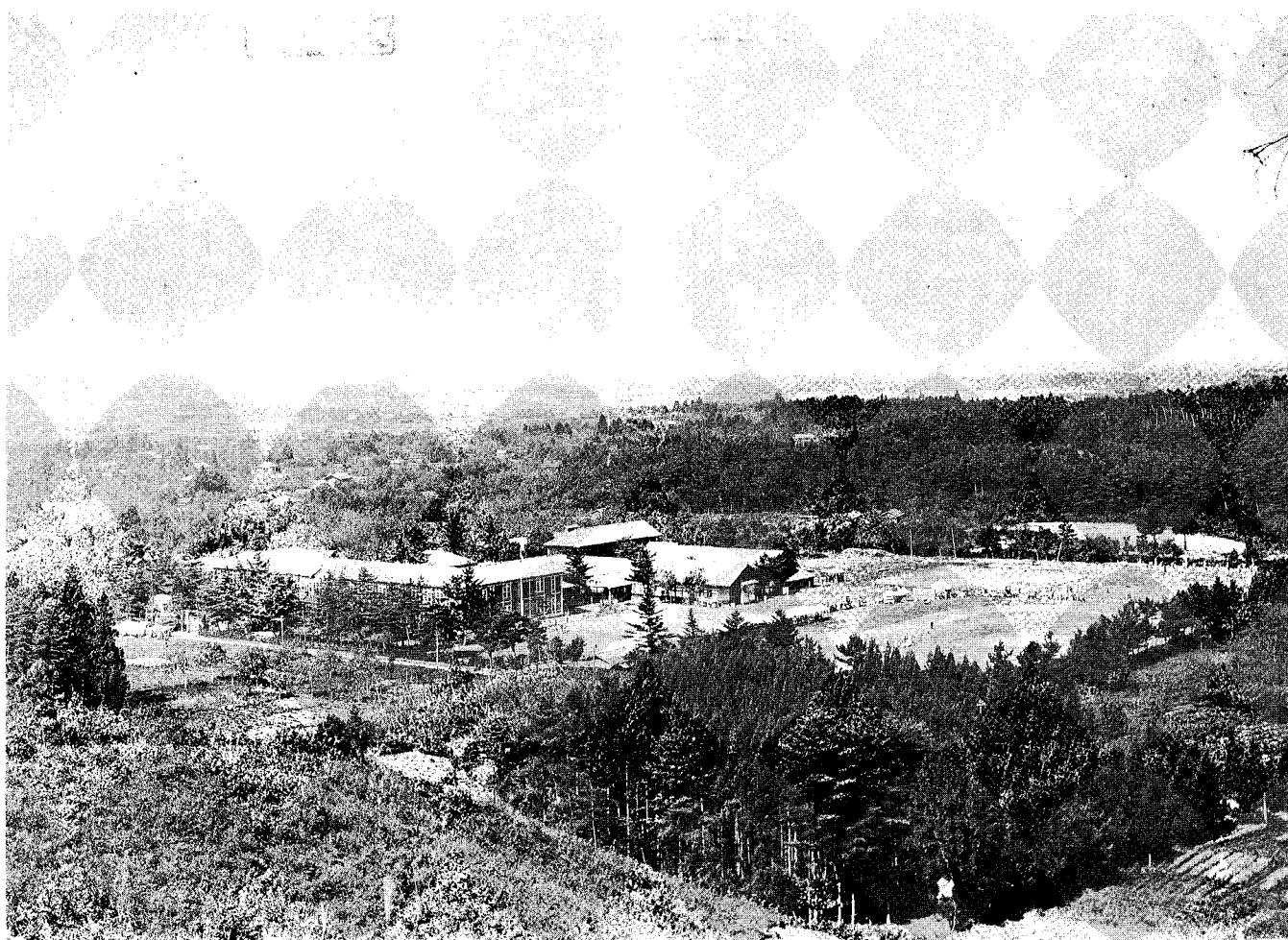


臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

平成3年度支部大会号 6.1



東京支部大会プログラム

平成3年6月1日(土) 午後3時

於 池之端文化センター

第 一 部

開 会 挨 拶	場内指令, 組織委, 副委員長	伊藤 勇五 (中33)
	司会進行	篠川 恒夫 (高2)
		山西愈佐子 (高8)
		鶴巻 浩 (高10)
経過並び会計報告	事務局長	中村 倉吉 (中22)
会計監査報告	経理部会長	芳賀 健一 (中33)
支 部 長 挨 拶	組織委員長(兼)	佐伯 益一 (中27)
来 賓 挨 拶	同窓会長	茂野 敏郎 (中17)
	同窓会副会長・村松支部長	貝瀬 弘 (中28)
	学 校 長	佐藤 義雄
	同窓会担当職員	大塚 滋明 (高2)

第 二 部

懇親会開会挨拶	総務部会長	斉藤 和男 (中33)
乾 杯		(出席高齢者の中より)
歓 談 ・ 会 食		
余 興	企画部会長	佐久間英輔 (高6)
(特別出演)		(村松太鼓, 演歌歌手, 他)
抽 選 会		鈴木多喜男 (高4)
写 真		広 報 部
場内インタビュー		深見 洋子 (高7)
		大橋 貞夫 (高10)
手 締 め		支 部 長
万 歳 三 唱		学 校 長
閉 会 挨 拶	広報部会長	沢出 越允 (高6)

受付, 案内, 大会運営には支部役員全員が当たる(氏名省略)

(表紙写真について)

昭和16年秋, 創立30周年記念時, 臥龍ヶ丘頂上より旧校舎全景を写したもの(右方上方に見えるのが赤山である。校舎の前側は今では幼稚園, 工場, 住宅等がぎっしり建っている。

[ごあいさつに代えて]

雑感



支部長 佐伯 益一

先般、母校を訪れる機会があって校長室でしばし渡辺校長さんと歓談した。“生徒の質が非常に良くなった”、“剣道で相当な成績を挙げてきた”等々色々話を交わした。その直前、大先輩の成田均氏(大正10年、第5回卒)のご子息が学校へ見えられて居た。父親の卒業した学校を見たいとの事であったが、名刺を交換し、幸い持っていた支部会報をお渡しする事が出来、お父上に宜しくと伝言出来た事は大きな収穫であった。許しを得て校内を独りで散策した。昔の面影は何処にも見出せなかったが行き交う生徒の礼儀正しいのに驚いた。何処の誰だろうという顔をしながらも女生徒も男生徒も軽く頭をさげ目礼をして通りすぎてゆく。言葉をかけてもハキハキしていて好感が持たれた。私の会津なまりの津川弁がかえって恥しかった位である。部活でも威勢のよいかけ声が聞える。廊下の壁一面に書道の作品が掲示されていたが仲々の達筆で生徒の素質を窺い知る事が出来た。夫々に於て生徒は頑張っているのである。

本年10月27日には愈々母校創立80周年記念式典を迎える。一つの節目の年でもある。創立以来色々の変遷を経て来たが人間に例えれば所謂傘寿の祝いである。今どき

は鼻たれ小僧とも云われるが只、年を経たからと喜んでばかりもいられない。記念事業として屋内練習場の建設が予定されているが効果的な使用を望みたい。己にピッチングマシンも設置されていると聞く。今後の活躍を期待したい。

私が旧中に入学した昭和12年頃には県下には商業、工業を含めて18校位の中学校しかなかった。そして競争が激しかった。わが母校でも創立以来優秀な人材が輩出していた。今では県下には県立校が100校もある。公私立を入れると116校もあると聞いている。困みに全国では5,506校の国公私立の高校があるとの事だが夫々学校の特色を生かし伝統を守り又は伝統を築きあげつゝ努力している事は今更論を待たない。母校村松高校とて例外ではない。恵まれた自然の環境も県下に於ては最右翼ではなかろうかと思う。

今、私の危懼する処は将来人口減少に伴い高校が余ってくるのではないかということである。従ってそれに生き延びるために、今から充分な活性化を図り、切磋琢磨の精神を涵養しておく必要があるのではないかと考える。

ご挨拶



村松高等学校長 佐藤 義雄

4月1日、県教育委員長から辞令をいただきました。村松は私にとって、昭和16年から18年までの間家族で住んでいた懐かしい町であります。町の広報は、風のみち、光のしずく、時のろうか、魂のこえ、土のかおりと村松の豊かな自然や歴史と伝統の重さを表現しております。このようなすばらしい町、幼き日のふるさと村松に赴任するという、いささか運命的な出来事に感動を覚えております。

新学期を迎え、在校生には、私が学校にきて感銘を受けた二つのこと、先輩の心意気と流した汗のすばらしさを、赤煉瓦の校門とマウンドの土に託して話しました。また、新入生と保護者の方々には、福沢諭吉の著した「窮理図解」の序文と校歌にある「明朗の和気みなざり」「見よ質実に清純に」を引用して、「心はいきいき、態度ははつらつ」を高校生活の指針とするよう呼びかけました。

村松高校はいま、新潟県下の高等学校が抱えている課題や問題点をすべて持っております。先生方は一樹百種の重要性を痛感しており、加えて、同窓の方々や地域の人たちの期待に応えるため、学力の向上を図り、個性を

生かす教育の推進に努めております。平成3年度からは、進学クラスを設けましたので、進学指導の充実に力を入れたいと考えております。県教育委員会も平成3年度の進学指導推進事業実践校に村松高校を指定するなど、進学対策の研究・実践を全面的に支援しております。

さて、本年度の最大の行事は、創立80周年の記念式典であります。目下、村松支部の役員の方々々と募金活動をしてありますが、「松城」と「飛龍」の生みの親である東京支部のみなさまと心をつなげて、式典を成功させるとともに、村松高校の活性化を図るため最大限の努力をする所存であります。

おわりにになりましたが、貴会並びに会員各位のますますのご発展とご健勝を祈念いたしまして、近況のお知らせとご挨拶といたします。

- 新発田市出身
- 新潟大学理学部卒業
- 昭和12年12月12日生
- 新潟県教育庁高等学校教育課 管理主事から

平成2年度、東京支部の動き

平成2年4月1日より同3年3月31日までの東京支部の活動状況を御報告いたします。（会報第9号で平成2年度の東京支部の動き、とあるのは平成元年度の誤りでした。）

平成2年

- 4.14 支部幹事会、於高輪鋼管クラブ、出席23名、前年度大会出欠者調査、大会案内書類整備、終了後懇親会。
- 5.12 支部幹事会、於陽寿院。出席15名、大会打合せ、案内状発送作業
- 5.17 会報9号原稿、印刷所へ送付
- 5.30 同上校正原稿、印刷所へ再送。
- 6.13 同上印刷完了、支部事務局へ納入。
- 6.16 東京支部大会、於池之端文化センター、午後2時より出席97名。平成3年度の会場を契約する。
- 6.22 総務、経理部会、於事務局、出席4名（中村、佐伯、齊藤、芳賀）大会収支につき協議。
- 7.21 支部幹事会、於湯島“江戸屋”、出席14名、支部大会反省会及び慰労会
- 8.17 本部同窓会総会、於村松“新滝”、東京より佐伯、中村鈴木、鶴巻、佐久間（英）、深見、見方の7名出席。生徒のブラスバンド出演に対し、支部よりテレホンカードを贈る。二次会、於“木むら”
- 9.6 校門、通用門扉改修の件、佐伯、渡辺校長電話打合せを行う。
- 9.8 広報部会、会報10号編集会議、出席5名、於鶴巻幹事会社（沢出、大橋、鶴巻、深見、佐伯）

- 10.3 同上、出席5名。
- 10.14 赤山会、於新宿三井ビル内三井クラブ、出席17名（会報10号に掲載）
- 11.10 広報部会編集会議、於鶴巻幹事会社、出席3名（沢出、鶴巻、大橋）
- 11.19 会報10号原稿、印刷所へ送付
- 12.3 同上一次校正完了
- 12.6 校門々扉改修完了（村松町、佐々木組施工）
- 12.12 会報二次校正完了、印刷所へ再送
- 12.21 会報印刷完了、支部事務局へ納入
- 12.22 支部幹事会、於高輪倶楽部、出席17名、会報発送作業袋詰400部、終了後同所にて忘年会

平成3年

- 2.16 支部幹事会、新年会、於御徒町“吉池”、出席18名（2名欠）母校創立80周年記念行事について
- 3.1 母校卒業式、今年度卒業生288名自動的に同窓会会員となる。
- 3.9 母校同窓会支部長、常任委員長会議、12時、於“木むら”80周年記念行事、特に募金活動に関して。東京より佐伯支部長出席（15名）
- 3.23 広報、企画、経理、合同部会、会報11号編集会議、於鶴巻幹事会社、出席8名（沢出、大橋、鶴巻、深見、佐久間、鈴木、芳賀、佐伯）
- 3.30 決算打合、於事務局（中村、芳賀）

以上

平成2年度収支決算書

自平成2年4月1日～至平成3年3月31日

松高同窓会東京支部

（単位：円）

収入の部			支出の部		
項目	金額		項目	金額	
支部会費	705,000		大会経費	903,884	
大会収入	756,000		会議費	96,509	
大寄付金	191,000		払込手数料	12,697	
広報告知料	75,000		通信用費	141,734	
前期繰越収入	29,002		印刷用品費	307,358	
	126,193		事務用費	33,398	
			母校門扉改修費	82,837	
			雑期繰越費金	82,474	
合計	1,882,195		合計	211,141	
次期繰越金	94,134				
郵便貯金	111,283				
普通預金	5,724				
手元現金					
			計	211,141	

上記の通り報告いたします。

平成3年4月14日

事務局 中村 倉吉 ㊞
経理 岡本 和子 ㊞

監査報告書

上記の収支決算書は監査の結果適正であると認めます。

監事 芳賀 健一 ㊞

平成2年度支部会費納入者氏名

◎平成2年度分会費納入者（其の二）

平成2年10月1日～平成3年3月31日

笠井 勉、広瀬 憲、鈴木ヤヨイ、奥津嘉雄、小島真一（以上5名）

◎会費納入時における寄付納入者（振込（其の二））

（単位千円）

小浜毅郎3、坂爪圭子3、坪谷次郎3、宮 健三3（以上4名

12千円）

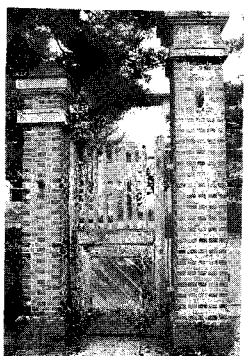
平成2年度における東京支部への年会費納入者は先に会報第10号に発表した230名の方々と合わせて合計235名となりました。

その他38名の方々からも寄付金を頂き、厚く御礼申し上げます。平成3年度も何卒よろしくお願い致します。

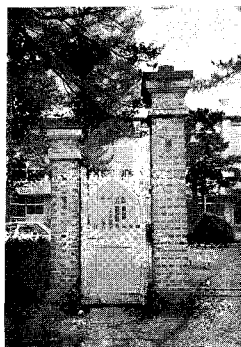
◎母校正門通用門々扉、東京支部で補修

平成2年8月の母校同窓会総会懇親会の折正門通用門門扉が老朽化して補修の要がある旨、出席の鶴巻幹事が話を聞いた。後日、その報告を受けた佐伯支部長、中村事務局長がその費用は東京で負担しようと協議、始めは支部幹事有志の寄付行為によってとの話もあったが、“これは公に類する事であり東京支部で協力という事が筋”との事で幹事会で決定した。早速、支部長より渡辺校長に申し入れ、又、鶴巻幹事と業者の岡佐々木組との綿密な連絡により、工事に着手、平成2年11月末に完了した。

補修後、渡辺学校長より佐伯支部長宛に下記のように礼状が寄せられている。



(在 来)



(完了後)

(前略) さてこのたび80周年記念事業のトップを飾る本校正門脇の扉が新調されました。これも偏に貴台様はじめ東京支部の同窓各位の心温まるご支援の賜ものと衷心より感謝を申し上げます。先日、貝瀬、松尾両氏と五泉亀田、新津、新潟、津川の各支部長さんに募金の協力をお願いして参りました。向寒の砌ご自愛のほどお祈り申し上げますお礼といたします。(12月18日)

◎東京支部の幟(のぼり)が出来ました。

本年度の支部大会から、目にも鮮やかな緑に白く東京支部名を打ち抜いた幟が2本、お目見えし、大会に色彩を添えることとなった。

これは佐伯支部長のご寄贈によるもので、今後いろいろの会合に使用させていただく事となる。アイデアマンとしての佐伯支部長の御活躍に敬意を表し、御礼を申し上げます。

松高創立80周年に寄せて(転任あいさつ)

新潟市立沼垂高等学校長 渡 邊 建 夫

このたび、松高創立80周年を迎えるに当たり、屋外競技の雨天及び冬季間における練習場の建設を記念事業の目標に掲げ、5千万円の巨額を同窓各位をはじめ、企業行政、町民各位、保護者及び教職員が一丸となって、募金活動を展開しております。

そして、この募金活動を通して多くの関係各位が、松高を再認識され、また、松高の発展を念じていただくことにより、この大事業の意義は極めて大きいものであります。

この練習場の設計に当たっては、村松町役場の岩野新一氏の並々ならぬご尽力によるものであり、激務の傍ら村松の町民として、献身的なご協力を賜っております。

さて、平成3年度の松高を希望する生徒は定員を若干上回りました。村松、五泉の中学生諸君が大部分ですが、結果として、学力の厳しい生徒もおります。現在、95%の中学生が高校に進学する状況において、高校の格差が定着しており、文部省の担当局長は、最寄りの高校に入学する、いわゆる小学区制を再考し、学力、芸術性、スポーツ等様々な能力を持った生徒集団による教育の活性化に注目しています。

平成2年度に、松高の学習指導委員会は生徒の活性化を図るため、進学クラスの設置を提案し、職員会議に数回の論議を尽し、平成3年度の1学年から実施することになりました。進学クラスの生徒は大学、短大、高等看護学校志望としました。このことを関係中学校長に伝え意欲ある生徒諸君の受験をお願いしました。この試みは今後の授業内容に深く関わる事でありますが、先生方のご努力を期待するところです。

今回、県は松高の進学体制に対し、夏期休暇の合宿学習や先生方の先進校視察等に応分の予算を付けて援助をする運びとなりました。

そして、80周年の式典を控えた矢先、図らずも、私は沼垂高校勤務を命ぜられました。松高に2年間お世話になり、東京支部の皆様からは、常に温かいご激励を賜わり、本当に有難く、感謝にたえません。

幸い、私の後任佐藤義雄先生は県教育庁管理主事の要職を歴任され、人格、識見共に優れた校長であります。

最後に、雨天練習場の完成を祈願いたしますとともに、佐伯支部長のもと東京支部の皆様のご健勝とご発展を祈念申し上げ、松高の近況並びにお礼といたします。

〔創立80周年記念行事会議に出席して〕

本年3月9日(土)村松町「木むら」に於て創立80周年記念事業に関する会議が開催され、東京支部より私が出席した。

懸案の雨天練習場建設に伴う話が大半であったが、大方の皆さんには本部会報、募金依頼等で已に御承知の向も多いと思うが改めて私見を交えながら要約して報告したい。

〔Ⅰ〕◎以前に話のあった同窓会館建設の件は諸般の事情により中止となり80周年記念として雨天練習場建設の話が学校側の強い要望により浮き上り昭和64年度の同窓会総会に於て承認され実現の運びとなった。

◎建造物は鉄骨平屋建約32m×15mで480㎡(145坪)で9月末には完成の予定である。施工業者は今の処、決っていない。

◎予算は5,000万円を予定しているが湾岸戦争の煽りで若干オーバーするかも知れぬとの事(募集目標は祝賀費共5,600万円)

◎建設位置は昔の剣道場の隣で並列の形となる。(赤山側で明確な位置は判らない)

◎使用目的は雨天時の野球、サッカー等の練習場となる。

◎給排水設備、照明設備等については特に説明が無かった。

◎施設完了後は県へ寄付という形になり、県財産となる。

〔Ⅱ〕◎募金状況(3年2月28日現在)

〔学校関係〕

旧中	223人	3,291,723円
旧高女	75人	623,000円
高校	386人	4,455,000円
定時制、一般	30人	610,000円

支部長 佐伯 益一

3年生保護者	227人	1,108,000円
職員		460,000円
小計		10,547,723円

〔寄付内諾者〕

村松町 500万円、五泉市 450万円
蒲原鉄道、村松メリヤス、佐々木組、樋口敬治商店
各100万円

金鶏盃商事 50万円、トップニット工業、ル・ジュール 各30万円

小計	14,600,000円
計	25,147,723円

他に、鈴木商店、安中製作所、市川染工場、魚さいつ、田村鶴業、羽下商店、野崎織造工業、セキヤ機具店、村松町役場職員、新規卒業生就職先、取引業者へも募金協力を依頼している。

◎今までに要した費用、事務、印刷、郵送料等
1,418,093円

〔Ⅲ〕◎記念行事其の他

- ・記念式典 平成3年10月27日(日)
- ・記念講演 共同通信社情報統括部長
長賀一哉氏(高33回卒、東大卒)
- ・祝賀会 正午頃より村松町体育館で
- ・東京支部からの表敬訪問→別掲
- ・記念品 校章入り風呂敷

〔Ⅳ〕◎募金目標がまだ50%に達していないようです。僅かでも支部会員各位の御協力をお願い致します。

因みに東京支部への依頼目標は500万円となっております。東京支部では東京、千葉、神奈川、埼玉、栃木、静岡、群馬の各都県が管内だと説明しました。

◆母校創立80周年記念祭、表敬訪問。参加者を募集いたします。

東京支部では本年10月27日に開催される母校創立80周年記念祭に表敬訪問するため下記のように計画をたてました。東京支部としても初めての試みであり、これを機に尚一層の同窓親善を図りたく思いますので奮ってご参加されるよう御案内いたします。

- ① 期 日 10月26日、27日の2日間
- ② 募集人員 30名前後、7月31日を以て最終日とし及び締切りですが先着順で定員になり次第締切ります。
- ③ 費 用 一人 27,000円。
- ④ 集合地 JR上野駅公園口に26日朝8時30分まで集合。観光バスにて9時出発。
- ⑤ 経 路 東北自動車道経由
(10月26日) 郡山→猪苗代→会津若松→柳津→津川きりん山温泉。(ホテル福泉にて一泊前夜祭)
- ⑥(10月27日) 朝、ホテル8時30分出発。

途中観光、正午頃学校到着、学校参観後祝賀会出席、午後4時頃、村松発、関越自動車道経由にて帰京の予定。

⑦ 申込方法 ハガキに住所、氏名、卒業回、参加希望と記入の上支部事務局へ申込むこと。事務局では整理の上会費振込用紙と案内書を後日送付するので会費を振込むこと。

⑧ 其の他 昼食、車内飲物等は一応用意しておきます。

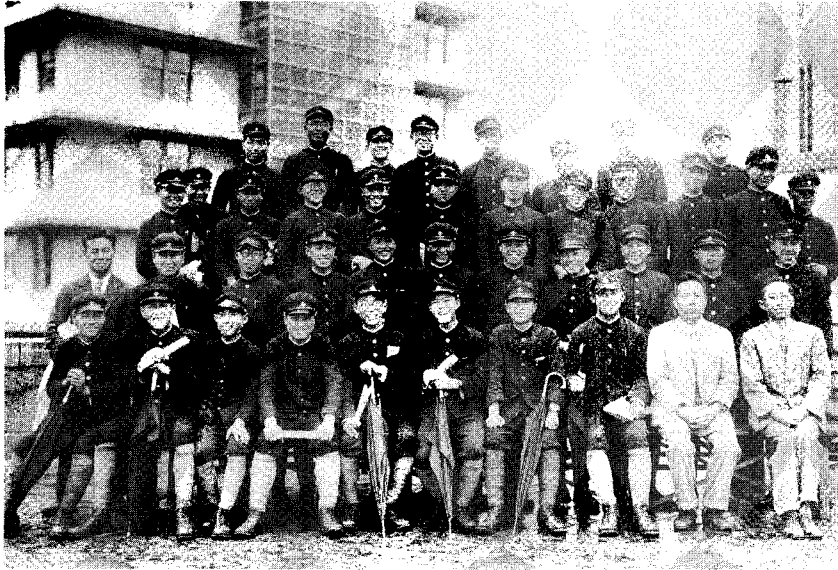
見学場所としては、猪苗代、野口英世記念館、民族生活資料館、飯盛山白虎隊記念館、柳津虚空蔵、滝谷慈光寺、村松公園、早出川ダム等を予定しておりますが時間の都合により変更することがあります。

※詳細については企画部会にお問合わせ下さい。(佐久間英輔、鈴木多喜男、石黒四郎、又は佐伯支部長)

思いでの写真館

秘蔵写真をお貸し下さい。

旧中21回生徒の修学旅行記念（昭和10年5月）

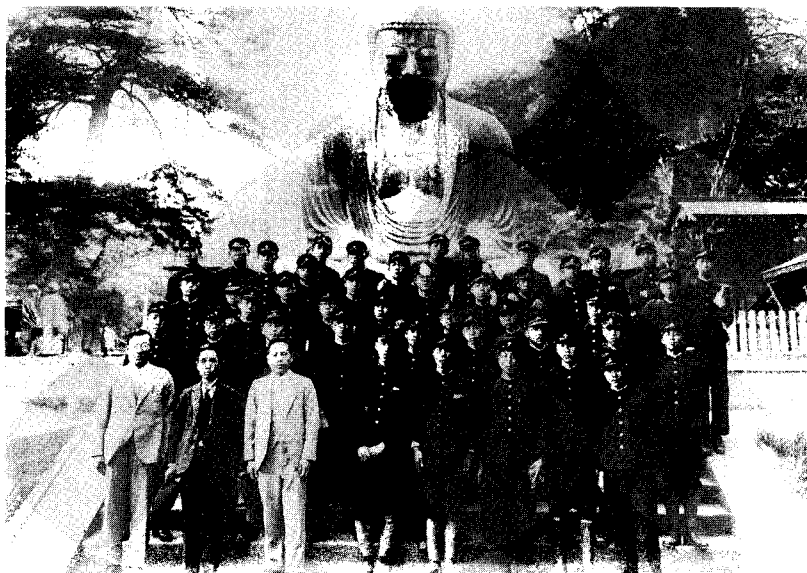


これは京都市内見学のとき撮影したものと思われるが当時の臥龍第23号が手許にないので、今一つはっきりしない。最前列から2列目、左から3人目は岡島博氏であるので、旧中21回生徒とわかった。（引率は里見、本多斎藤教諭）

余談であるが、博さんは岡島教頭（英語）のご長男で私より7年ほど上級である。幼少のころ岡島家へよく遊

びに行ったが、この博さんと弟の哲さん（旧中23回）はいつも机に向かって勉強していた。兄弟ともなかなかの秀才で、博さんは東大を出られたと聞いた。しかし、若くして胸部疾患で亡くなられた。また哲さんは、中学4年で陸士合格、そして昭和20年8月終戦の日に岡島陸軍大尉は、皇居前において短刀で割腹し果てたと、彼の同級生吉田松二郎氏（故人）から聞いた。

旧中22回生徒の修学旅行記念（昭和11年5月）



昭和11年5月3日、旧中22回生徒は村松駅から電車に乗り、7泊8日間の修学旅行に出発した。東京、横須賀

鎌倉、江ノ島、宇治山田、鳥羽、畛傍、吉野、奈良、京都のほかの名所、旧蹟を訪ね、9日に京都駅発の夜行列車

に乗り、10日の午後に新津、五泉を経由し村松に帰着した。旅行費用は、1人当たり乗車賃15円、宿泊食事代8円40銭、見学科ほか1円余で、計24円60銭であった。

(引率は石田、笠原、斎藤教諭)

臥龍第24号から

これから鎌倉だ。鎌倉駅を見た時流石は日本有数の避暑地だ、何とスマートだなと思ふ。(中略)電車で長谷

へ、有名な美男大佛に謁する。さう思っれば成程な^{のそ}んと云へぬ味を見せて居る。その胎台を覗く者もあった。途中観音さまを拝したが大佛に^{あつとう}壓倒されて殆ど心に残らず。……(茂野記)

(中28 斎藤朝之)

(◎戦前の漢字と仮名遣いになっています)

関東関西方面卒業記念旅行の折

昭和15年5月4日、江の島にて、旧高女19回卒 当時高女3年生)

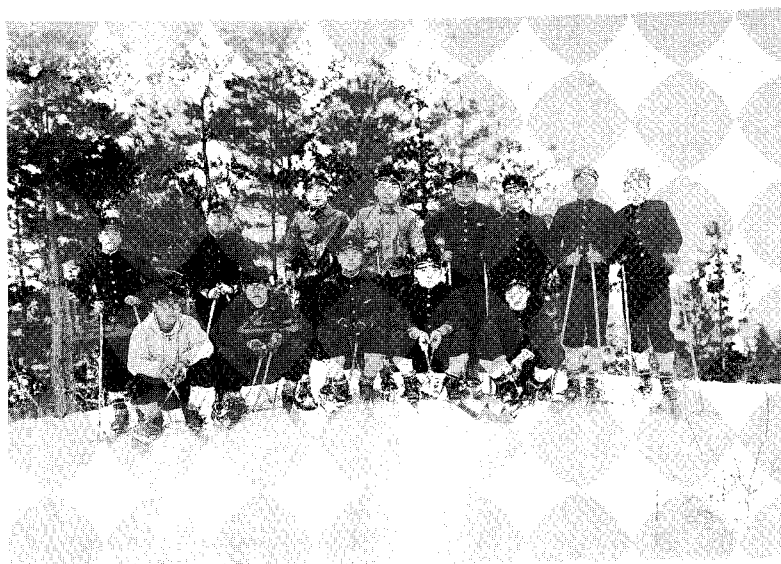
(3枚共熊倉芳枝さん提供)



在りし日の高橋(向田)^{まさのぶ}賢陳先生
(19回卒の1, 2年の担任でした)



晩年を東京立川市でお過しの川上
長衛先生。とても柔和な好々爺に
おなりです。
丹精されたハイビスカスの前で



昭和15年3月、5年生の卒業を前に、スキー部員の記念撮影
臥龍ヶ丘スキー場山頂にて（佐伯 益一）

二年	奈良泰夫	二年	貝瀬 弘
	(バレスサイドビル常務)		(副会長・村松支部長)
三年	杉崎榮二	三年	木村立也
			(蛸屋主人)
三年	吉村武恒	五年	松尾吉信
			(村松町民生委員)
四年	木村大三	五年	吉田正平
	(木むら主人)		(陸連理事)
四年	滝沢 弘	亡	藤田政次先生
四年	田代 勇		
三年	佐伯益一	五年	西山力雄
	(東京支部長)		



小柳先生、柳沼先生を囲んで記念撮影
(昭和22年5月頃テニスコートにて)
高4 — 旧制中学入学最終学年（鈴木多喜男）

お便りの中から

◎ 長い間母校同窓会を担当、同窓会の発展と会員の交流に尽力された酒井邦男先生（高5回）がこのたび新津高校へ転勤された。

ご挨拶状を頂いたが、きわめて簡潔、一編の詩でもあり心暖まる思いである。紹介させて頂く。（佐伯）

△－－－－－－－－△

長かった冬も過ぎ花々の美しい季節となりました。

お元気でお過ごしのことと思います。

四月より新潟県立新津高等学校に勤務が変わりました。

通勤が楽になり喜んでおります。

村松高等学校での八年間は貴重な経験となりました。

お世話になりました。

そして、ほんとうにありがとうございました。

およせいただいた暖かい御恩情に感謝しながら、新任校で頑張ります。

80周年を前にすみません。

残り四年を大切にします。

1991年4月

酒井 邦男

◎ 前略、何時も御活躍敬服申しあげております。当方相変らず夫婦で勝手な趣味にと、主人は油絵、私はピアノの練習とやってみたのはいいけど画く度に、下手になって、ただ塗りたい主人をながめ、私は又、使ったことのない筋肉をよびおこしたせいか早速左の肩が痛くなり、このところ練習もおやすみ、とつくづく老化した身体を嘆いています。

ところで80周年の会報のこと、昔の写真はばけたものばかりなので今回は先生、お二人の写真を同封してみました。

川上先生はまだお元気で偶然立川市へ越しておいでになりまして、おつきあいが始まりました。又高橋(向田)先生の方はこのクラス会の翌年、亡くなられましたが、それこそ数十年ぶりに御健在のことを知り東京の方へお招きしたわけです。参考になるかどうか分かりませんがよろしく。

尚村松の80周年の記念誌の方からも原稿依頼があるので、さて何を書いてよいやらと云うところで、とてもむ

づかしいことは書けませんで申し訳ありませんが女学校時代の一つの思い出と思って下さい。――後略――

（旧高女19回卒 熊倉芳枝さんより、夫君は旧中27回卒 熊倉 悟氏）

◎ 前略ごぶさたをお詫び申し上げます。

お便りをいただき五十数年前の松城健児の頃を思い起こしております。

ご照会の方は26回の田代勇さんです。

同君も柔道部だったのでよく記憶しているのですが、柔道部で冬期だけスキー部に所属して距離競技（当時の呼び方）を専らやっていると記憶しています。坂田武さんに訊ねたら、戦後、北海道で死亡されたとのことでした。

県下の森林組合役員研修会で猪俣国二さん（中23）と五十数年ぶりにお会いする機会を得て、23回卒の先輩たち、わけでも故吉田松二郎さんのことなど一夕思い出を語り合いました。いづれ折を見て訪問させていただくことにしてあります。また、28回の齊藤朝之氏著「零戦に乗って」を齊藤氏と同期の藤田精作氏（村松町下町在住）から借りて読ませてもらい、我々の青春はこうだったと再確認したしだいです。齊藤勝先生（五甲主任）北原新策先生（五乙）に担任していただき卒業した私達25回生は昭和45年6月に湯沢「高半旅館」で同期会を開催、両先生から出席していただいたのが両先生との別れとなりました。

そのことなども書き添えて朝之氏にお礼の手紙を出しました。その折の幹事は矢部清文君（当時六日町財務事務所長の職にあったので）故今井政夫君が県の保健課長をしていたこともあり、高橋半左エ門社長（当時県議）からビール1ダースの御祝儀を頂戴したことなど一つひとつ思い出されます。

健康に留意しつつ、母校のために些かなりと役立ちたいと思っています。

東京支部皆様方にくれぐれもよろしく。

平成3年4月、松尾吉信氏（中25）から佐伯支部長へ

寄稿

一枚の赤紙、サメの刺身

私が東部第4100部隊に召集されたのは昭和19年1月11日、大東亜戦争も風雲急を告げ、国家総力を挙げての戦時下であった。朝から地吹雪のはげしい夕刻「福原さん赤紙ですよ」と役場の一人が勢いよく飛び込んで来た。正直言って何の感懷も湧かなかった。

「とうとう来たか」と召集令状をしみじみとみつめて居た。父母は「良かった良かった」と喜んでおった様である。父はその頃、出雲崎町の助役（三期目）をしており職掌柄名誉この上なしといった表情であった。

入隊は1月13日、一日しか余裕がない。翌日早速町内の挨拶廻り（当時岩船町在住）石井神社、岩船神社に必勝の祈願をし、その夜は歓送会を開いてもらった。折悪しく海は大荒れで魚も獲れず、鮫の刺身が妙に記憶に残っている。勝井町長さんの得意の謡曲も加わって大いに盛り上がった。物資不足の折、父も母も精一杯のもてなしをしてくれた。

英語の勉強

女学校の中庭にはクローバーが一杯あった。お昼休みの時間になると四つ葉のクローバを夢中で探し求めている。「あったあった」とよく見つける友達がいた。私は仲々見つけられず今日も幸福は彼女に行っちゃったか、と何時も情ない思いで教室へ戻った。午後は英語の時間だ、段々と難しくなってゆくリーダーをひろげ、さて今日こそはと身構える。次第に居眠り族の姿も増えて来ている。

のんびりと発音なさる土田先生の「ワンスモア」と云われた声がどこからか聞えて来るような気がする。今思うとどうしてももう少し真剣に勉強しなかったのかと、一応小さな単語帳にびっしり書きつけて単語のスペルのまる暗記はしてみるものの一夜漬の勉強のやり方では所詮結果はしれたもの、皆々遠い昔の思い出になってしまっている。

改ざんでは判らぬ。改竄であるべきだ

兵庫県の農業高校の入試で受験生の答案が校長の指示により書き改められるという事件が新聞紙上を賑わしているが、見出しには、どれも「改ざん」と表わしている。これは「ざん」の文字、即ち竄^{さん}の字が常用漢字に指定されていないからである。従って本当の意味が判らないのではないか。辞書をひくと「竄」は鼠（ねずみ）が穴の中に入る義にて逃げ置ることとある。校長始め他の教師がねずみのようにこそこそと穴の中にかくれて文章を取捨

福原平八郎（中26回）

翌日大勢の人々に見送られて、雪の止んだ出雲崎をあとにした。勿論生還は考えなかった。召集地の横浜まで東三条で合流した学徒達と一緒に車中の人となった。寄せ書きの日の丸を纏にした若者達は暗い車窓をみつめながら終始無言であった。

高射砲第117聯隊、これが私の入隊先であった。3ヶ月の初年兵教育を終え、幹候、陸軍高射学校とめまぐるしかった。

帰隊し、三つ池第2中隊（その頃横浜市鶴見区三つ池公園の上に兵舎があった）に配属され京浜地区の防衛にあたった。かえりみて往事茫々、只、感無量なるものがある。

私を見送ってくれた人々は殆んど他界しあの当時の事を語る人はない。戦友も毎年数が減り、寂寞たる想いである。（平成3年正月、柏崎の新聞に寄稿したものより）

熊倉芳枝（旧高女19回）

当時日支事変^{さなか}の最中とは云え、まだまだ新潟の片田舎の町は頗る悠長なものだった。或る時東京の青山女学院より転校して来た方があった。さすが都会育ちの洗練された、それこそ今まで聞いたこともない様な綺麗な発音で我々にとってはかなり難しい箇所をすらすらと読破している。私は驚きで一杯だった。

心の中で英語って何て素晴らしいんだろうとつぶやきながら今からでも遅くないかな等と考えながら一年生の最初の本から引張り出して遅まきの勉強を始めてみた。最初の方だけはよくわかるけど段々と文章や文法が難しくなるにつれ、やりきれなくなり何時の間にかもとの木阿弥の状態になってしまっていた。

そして小さな努力にも拘らず四年生の三学期、私の通知簿には乙と云うあひるがついていた。

佐伯益一（中27回）

書き改めた事になる。改竄と書いてこそ始めて意味が判る。政府の決めた常用漢字の枠にとられる事なく、マスコミや学校でも、どんどん古来からある意味の含まれた漢字を使うべきであり学校でも、どんどん教えてゆくべきであろう。教えていけないという法律は無い筈だから。それにしてもこういう文章を書くと、亡くなった旧中時の齊藤勝先生を思い出すのはどういうわけであろう。とにかくこの農高の生徒はかわいそうだなとの思い一入である。

◎一年違いの同期会

渡辺 八郎（高3回卒）

「この会が終わったらご一緒にませんか。」誘われたのは一昨年の同窓会の時でした。「けっこうですね。」私達78人、後に従った。ところは新宿。伊勢丹の向いの裏通り。うす暗い階段を昇っていく。シャンソンの音色が流れてきそうな小さなスナックでした。

「ここへ来ると必ず誰かが居るんですよ。」寄り集う場所をもっていることは羨ましいことで。人の良さそうなママさんが独りニコニコして迎えてくれた。

「卒業して何年になりますか。一緒にお話できるのは初めてですね。」まずは乾杯といきましょう。失った青春の“輝しい記憶？”をたぐりよせるのに、時間はかからなかった。誘ってくれたその人は昭和21年旧制中学最後の入学でした。高校2年まで4年間。下級生なし。気の毒な一つ違いの兄弟なんです。部活も一緒。裏路を歩くのも一緒。学年の隔たりの無い“苦楽を共”にした一年違いの同期生さん。男と男の仁義。女と男の夜話。

「カラオケもありますよ。当時の流行歌でもやってみませんか」「けっこうですね」「影を慕いて」「星の流れに」けだるい世相でした。一面「青い山脈」「白い花の咲く頃」でもありました。

「昔の歌はいいですね。どうも最近の艶歌には余韻が

ないですよ」時の流れが速くなったせいでしょうか。

「プラトニックラブ」なんて言葉はどこへいったのでしょうか。衣食足りて、いい世の中になりました。それにしても——いやいや、だいふ時代屋臭くなってきたようで。「遠い方、時間ですよ。」女性もいることでこの辺で。ほんとうに懐しい一時でした。梶屋さん、両鈴木さん、他のみなさんありがとうございました。ほどよい時代屋でいたいものです。もう一つの同期生さん、また今年もお会いしたいものです。

◎出会いさまざま

大橋 貞夫（高10回）

私が、W先輩と初めて会ったのは10数年前、とどろき陸橋近くの馴染みの酒屋である。そこの主人は橋田中学の出身で、W先輩は、そこで教鞭をとっておられた故に我々は、一様に自由が丘の先生と呼んだ。暫くして、大先輩のS氏等数人と自由が丘で一杯やるから来いと。の事矢張り新潟出身者の店で、何回かやっている内に何時の間にか、高校10回の幹事になっていた。

すぐ友人のTを幹事に推薦し、数年後、女性幹事2名をTが推薦したので、何かと心強い限りである。自分の幹事になった成り行きを思うとき、それぞれの地域で、普段からの気軽な同窓生同士の交流が、どんどん増えることを念願する者である。

松 城 讃 歌

平成3年春 福 原 平八郎（中26）

一、松籟丘にざわめきて

頬に受けたる雪の華

若き思索の琴線は

惜春の情かき鳴らし

雪解の径に泪しぬ

二、緑さやかにめぐる山

城下の町の明け暮れに

深き憂いの乙女等は

黒髪風に打たせつつ

愛宕の山をさまよいぬ

三、都に遠く秋閑けて

静寂の町をひとりゆく

水清冽に白山は

久遠の理想示しつつ

雲ゆく彼方懐れぬ

四、ああ清白の雪掬い

撩乱春の宴恋う

炎熱夏の野に伏して

秋冷窓に人想う

臥龍の門に栄あれ

寄稿 今村 均大将回想録を再読して(其の二)

亀 嶋 謙 (中22回)

さて、均少年が甲府中学2年の終りに父はまた転任で、こんどは越後の新発田^{しばた}という処の区裁判所の所長になられた。均少年も、その地の新発田の中学へ転入した。ところで私には新発田と聞いただけでも懐しい。私の祖先は愛知県岡崎在だが、私は幼年、少年時代を新発田と、その近辺で育った。

細長い新潟県の新発田は山形県や福島県に近い。古い城下街で溝口藩五万石の町だ。小さな町だが、歩兵聯隊(第16聯隊)があり、軍縮になる前は旅団司令部があったので、こんな小さな町にも陸軍少将一つまり閣下が住んでいた。また近在には大平野を控えて大地主がいた。有名な酒田の本間家と肩を並べる全国屈指の大地主、市島家、白勢家、五十嵐家、星野家と何れも多額納税の貴族院議員、これも閣下級である。

お国自慢がまだある。明治、大正にかけ一代で大倉財閥を作った大倉喜八郎、忠臣蔵で名高い堀部安兵衛(中山安兵衛)がでている。この人達は史上で有名だが、それ程でなくてもまだいる。例えば大正末期頃、名の知られた童謡作家、^{かきやうし}落谷虹児が生れ育っている。名前より童謡の方が知られているだろう。

○花嫁人形

きんらんどんすの帯しめながら

花嫁御寮はなぜ泣くのだろ (大正12年作)

○松葉の十字架

海べにちらばる貝がらは

みんなむかしは生きた貝

みんなむかしは生きた貝 (大正14年作)

その外「かっぱの子」が代表作だ。また落谷さんの少女の絵も懐しい。ロシア文学の原久一郎氏も新発田の出身だ。変わったところでは獅子文六作「大番」の主人公のモデル佐藤和三郎氏(ギューちゃんそのまま、小説は四国だが新発田の人だ)がいる。相撲界では学生出身で初の大関「豊山」がいる。町の人達は、その人達の名がでると鼻を高くするのである。町の人達の誇りでもあった。

新発田は、東南に二王子、飯豊二山の山系を、南方に松平山の山系が望まれる。加治川、阿賀野川の大河がそそいで水量ゆたかな中にある平野の町である。1年の半

分近く雪に苦しめられるが戦前までの気質は、人々の大部が農耕を営み勤強、純朴で忍耐強い。それに田舎としては大藩であったから人々は礼儀に厚く寛容の風があった。

今村将軍が、感情の激しくゆれる青春時代の4年間をこの地で育ち、学業をつづけられることを終生懐しみ、思い出の多くを記している。将軍の住んだ時代と私の住んでいた頃とは随分凡そ30年程の隔てがあるのだが、なお書き綴られている家、町並、維新後、やっとなお城のあったあたりの風景のこと、人情の厚いさま、殆んど変わってはいない。戦前は世の中のテンポはゆったりしていたのだろう。

将軍は日露戦争の初まる明治37年3月、新発田中学を首席で卒業、式の当日は卒業生総代で感謝の辞を述べられた。中学をでる頃、将軍は東京の一高か、東京高商志願であった。父上は自分の郷里である仙台の二高を進めた。しかし均少年は断然、一高志望で、将来は父に継いで裁判官になることが先づ第一志望、若し駄目だったら東京高商へ入り、早く実業界にでて、薄給に苦しむ母や幼い弟妹の手助けをしたい、それが希望であった。

しかし、人生は誰れしも大小はあるけれども大転機がある。将軍が中学を卒業した年の5月、父上が急逝されたのであった。裁判所の薄給と7人の子供をかかえた母は悲歎にくれるし、すぐ学費問題にひびいた。

その上、父親が生前、親戚の人の借入金の保証人として印を押したばかりに、その負債をもっていたから、たまらない。母は均少年に実情を話し、お前の父方も母方も元来は軍人だったのだから金の掛からぬ陸軍士官学校か或いは現役志願兵を進めた。

均少年は、同じ苦勞なら父と同じように独学しても、又は昼間勤め、夜間の大学へでも入って司法試験を受け裁判官になりたい希望を訴えた。しかし母は、父が生前から自分の子供達が裁判官になることを嫌っていたと初めて聞く話しをした。父は詩人でもあった。そして父の詩の多くは、裁く人の立場でなく、裁かれている罪人の感情をよく歌った。つまり犯罪防止の裁判官の心境を歌ったものが多かったらしい。裁判官は不当にしいたげられ

ている者、弱い者の味方だとばかり思っていたが、戦前の日本の法律制度は、国家と社会の安寧、福祉保護の大目的からで個人の保護はその次に考えられていたこと、また個人の犯罪というものの多くは環境、とくに貧困に苦しめられてのもので、その環境を攻められず人のみを責める。法は犯行の動機、その時の心理状態を考察するより犯罪の程度で、その罪状を責める。罪をにくみ、人をにくむ。法の権威と裁判官そのものの権威とは同格にみて、はじめて法の冷たさは緩和されるのに、法文の規定の方が、はるかに重くみられている。その寂しさからこんな思いを子供に継がせたくないとか常に母に述懐していた話、胸を打つこと、しきりであった。

しかし、まだ救いが残っていた。心配した中学校の校長が、この中学には、以前から近隣のある富豪の多額納税議員の方で、毎年卒業する生徒の一人を大学卒業まで学費をつづけ勉強させている人がおられる。その方にすすがる途があった。恩師は早速、その富豪を訪ね内諾を得てくれたのである。そして均少年を励ますのであったがそれを聞いた母は意外にも承知しなかった。

そのとき母親が均少年に言った言葉は胸を打つものがある。

均よ、他人のお情けで学問をつづけることは、その方に仕えてしまうことになる。又、万一その方が、なにかのことで学費が出せなくなれば途中で学校をやめなければならない。仮にそのお蔭で卒業したとしても、その方に不幸が見舞ったりしたとき、補助していただいたものは返済しなければならない。そうなれば、お父さんが友人や親戚の借金に連帯の印をおしたばかりに、一生涯うだつが上らない貧乏におちいった二の舞を演ずることになる。私は固く反対しますと。最後は、篤志家から無利息、期限の定めなしの条件で借入金形式を頼むことによって解決した。

明治38年4月、均少年は陸軍士官候補生の採用試験を受け全国で二番という優秀な成績で合格した。この時東京牛込の市ヶ谷の学校へ集まったのは1,200名であったという。

この頃の士官学校は修業年限が1年半だった。しかし内容は充実していて、陸士1日の行事は夕食後1時間の校内自由散歩が認められているだけで朝6時起床から午後9時半の消灯まで一分一秒も無駄なく教育を仕込まれ

たというから実質的な年限は3年に及ぶと考えてよからう。士官学校は学費無料であったが小遣いに事欠く将軍は勤めて読書室にこもった。父に似て文学も好きで広く愛読した。特に注目を引くことは、この頃、秘かにキリスト教のバイブルを読まれたことだ。生涯、信者にこそならなかったが、バイブルを丁寧に読み、キリスト教に理解を深めたことは、その後の将軍の人生感に大きな感化をもたらした。視界を広げた。明治時代のことだし、常時の軍人でキリスト教に理解をもっている人は非常に少なかったであろうと思う。将軍の慈愛心、恵まれぬ人や弱い人達に対する思い遣りの深かったこと、それは生来の性格によるものが多大であったと思われるが、またこの時代の辛酸、バイブルからの影響も見逃せないようだ。

人に対する思いやりなど一見なんでもないことのように考え勝ちだが、実は強い信念と勇気があることだ。

今村将軍は広く人種を越えて外地、植民地に於ても慈愛の気持ちを遺憾なく発揮されたが、しかし何時も常に激しい抵抗と批判を浴びた。例えば朝鮮部隊に在任中、不法に泣く小一家を救ったが、大きな勢力をもつ不法悪徳大商人らから猛烈な不評を蒙り、日本人会や総督府を動かし陸軍中枢にまで反対運動が広がった。また今次大戦中、ジャワ軍政時代の施政にも、降伏したオランダ軍に対する寛大な処置、現地人の登用など積極的な善政を布いたことで有名だが、これに対して敵国人を甘やかす、日本軍人の権威を失うものであるとして反対され、批難は特に軍部の上層軍人から起り屢々陸相や参謀総長のところまで提訴する者があったと云う。

読んでいくうちに、つくづく人間が嫌になってくる。そして将軍に対する敬愛の念を深くするのであった。

同級会開催のお知らせ

- (1) 昭和29年卒業（高校6回）生の同級会を本年8月17日(土)午後6時から東蒲津川町のキリン山温泉、ホテル福泉にて開催します。同級各位の多数の御参加をお待ちしております。会費男子2万円、女子1.7万円（幹事、沢出赴允、佐久間英輔、市川文夫、大関慶子）
- (2) 昭和17年卒業（中27回）生の同級会は、6月11日(火)午後5時より厚木市飯山温泉、元湯旅館で開催する。連絡はは幹事まで（幹事、熊倉 悟、中野 博）

計 報

昨年支部大会以後、次の方々が亡くなりました。
謹んで御冥福をお祈りいたします。

・飯田 清（昭19中29）平成2年7月16日

・樋口菊次郎（昭8中18）平成3年4月11日

・由良美智子（昭37高14）平成3年4月28日

東京支部

◎大会案内状発送作業



4月19日午後4時より、佐伯支部長、中村事務局長始め幹事19名が高輪の日本鋼管クラブに集合、6月1日開催の東京支部大会の案内状等の発送作業を行った。宛名を書く者、ゴム印を押す者、封筒に入れる者等夫々手分けをして一服する間もなく約2時間かけて終了。後は会費持寄りで懇親会を行ったが、東京支部の強さはこの点にあるのではなかろうかと痛感させられた。お陰をもって、23日には約450通の発送を終える事が出来た。あとは一人でも多くの同窓が参加されるのを願うのみである。（広報部）

編集後記

会報11号を会員の皆様にお届けいたします。母校80周年記念を10月にひかえ、関連記事を主として編集いたしました。

本号発行に際しご寄稿をいただきました方々に厚くお礼申しあげます。

印刷や校正ミス等多々ある事と思いますが、ご寛容のほどお願いいたします。

広報部会長

広報部よりお願い

会報「臥龍が丘は緑なり」への寄稿をお待ちしています。内容は自由ですができれば学校時代の思い出、郷里に関する事から等書いて頂ければ幸いです。紙面の都合上400字詰原稿用紙2枚～3枚以内で、お願い致します。

尚、同窓会や会報に対するご意見、ご感想もお待ちしております。より良い同窓会支部会報づくりのために、皆様の御協力をお願い申し上げます。次号（第12号）の原稿〆切りは9月末日です。

経理部よりお願い

平成3年度の支部会費をお手数でも振込用紙にて、ご送金下さいますようお願いいたします。

（支部会計年度は4月から翌年3月までです）

年会費 3,000円

尚、支部会計不如意のおりから、寄付金等、各位の浄財をいくらかでも上乗せして頂ければ幸に存じます。



佐伯支部長を囲み、経理、企画、広報合同部会

（3月23日）

平成3年6月 第11号

発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

広報部

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24
（榊寿内）

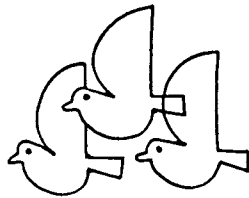
TEL 03-3445-6501

郵便振替 東京 2-136445

校 歌

旧県立村松中学校校歌

1. 塵の巷を遠ざけて
雲たち迷う白山の
麓に立てる松の群
見よ凌霄の気を含む
2. 緑色濃き木陰には
夏も尽せぬ泉あり
湧きて流れて末遂に
汪洋として海に入る
3. 落葉をくぐる流れにも
岩石砕く力あり
清きは水の姿にて
強きは誰か心ぞや
4. 万緑の気地に潜み
風雪野山に荒るる時
色さえ変えぬ常磐木の
強きは誰か操ぞや
5. 八億亜細亜の民率い
行手遥けき文明の
海原遠く漕ぎ出でん
これぞ吾等がつとめなる
6. それ英雄も人傑も
人の子吾等がたぐいなり
嗚呼松城の健男児
勇みて立つべし諸共に



旧村松高等女学校校歌

1. 愛宕の山のむら松の
常緑色の常磐なる
操を胸に日の本の
をみなの徳を磨かばや
2. 心は身はも真夏なほ
日に輝ける白山の
雲にもまさる清さもて
正しき道を進まばや
3. 其の名も高きこの里の
桜の花のうらうらと
のぼる朝日に匂うごと
気高き姿保たばや
4. 世界に比なくうるわしき
皇国の民と生れきし
幸をおもひていざやいざ
手を取り共に励まばや

新 校 歌

相馬御風 作詞
中山晋平 作曲

1. 普く照らす天つ日の
光を浴びて年々に
伸びてしまめ若松の
ときわの志操いや堅き
学徒われらの在るところ
明朗の和気みなぎれり
2. 見よ質実な清純に
進取の生気湧き溢れ
文明の花の咲くところ
希望は常に輝ける
道に我ら 進ましむ
努めなんいざもろともに

応 援 歌

1. 緑濃き臥龍ヶ丘に
轟くは我等が歓呼
若人の高なる血潮
たたえつつ春の日めぐる
2. いざ叫べ若人の誇り
わななける力の腕
見よや君歓喜の胸に
輝くは永久の勝利
1. 臥龍原頭幾星霜
切瑳琢磨の功を経て
からくれないの香に匂う
誉れは高き松城の
健児が胸に血やおどる
2. 我等がえらぶますらおの
誉れは海の湧くがごと
望みは雲のゆくがごと
月の桂をなゆずりそ
栄えある名をぞとこしえに
1. 松城健児六百が
祖国の為に剛健の
大図をここに定めんと
送りいぞせし我が勇士
覇権をゆずる事なかれ
我等六百ここにあり
2. 臥龍原頭精気あり
義憤に満ちし大丈夫が
驕奢の潮せきとめて
逸情の眠り打ち破り
高うつ胸の雄叫びに
進めとなるを如何にせん
3. 今壮快の晴れ戦
見よ雄叫びの只中に
我等が望み一筋に
肩にぞかかる勇戦士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり